



アンコールトム・バイヨン寺院 (カンボジア)

世界文化遺産アンコール遺跡群にある、仏教とヒンドゥー教の混合寺院。
周囲に微笑みかける巨像郡のふもとで、音楽を奏でる男たちの祈りとは。



戦乱からの復興を象徴する混合宗教寺院

カンボジア観光の玄関となるシャムリアップ空港。そこから車で20分ほどの場所にアンコールトム遺跡があります。カンボジアと言えば世界中の観光客を魅了するアンコールワットが抜群の知名度を誇りますが、ここアンコールトムの壮大さも引けを取りません。アンコールは「町、都市」、そしてトムは「大きい」。この名が表す通り、アンコールトムは周囲12km、東京ドーム60個分というアンコールワットの4倍もある巨大都市だったのです。この都市の中心に位置しているのがここバイヨン寺院。仏教に深い信仰を持つジャヤーヴァルマン7世国王が12世紀末ごろから建立を始めました。それは繰り返される戦乱を統治し、荒廃した首都復興の象徴でもあったのです。

元々は仏教寺院でしたが、後に王朝にヒンドゥー教が普及したこと、仏教とヒンドゥー教の

混合寺院となりました。これは柔軟な対応で宗教対立を避け、平和を維持するためだったとも言われています。

そして必見は“バイヨンの四面像”です。そびえたつ巨大な石像は50塔もあり、一番高い塔で45m。各塔には観世音菩薩を模した2mもの人面が四方に刻まれ、200個近くもの顔から見下ろされますから、これには圧倒されます。どの顔も穏やかで“クメールの微笑み”と言われる笑顔で人々を優しい気持ちにさせてくれます。カンボジアの人々はキラキラしたとても素敵な笑顔を持っているのですが、この時代から笑顔を大切にする国民性だったのかもしれない。

戦乱を終焉させ、平和を祈り、慈善事業に尽くした王ですが、安泰な時代が長く続くことはありませんでした。戦争、内戦とカンボジアは近現代まで争いと植民地支配の歴史を刻むこととなるのです。



バイヨンの四面像



□□□□□□□□□□



地雷根絶への祈り

男性の楽団が軽快なカンボジア民族音楽で観光客を楽しませてくれています。しかし近づけは全ての人々が障害を持っていることに気付くことになります。手、足の無い方。全盲の方もおります。この方々はポルポト政権下での地雷や爆弾の被害者なのです。カンボジアはこの政権が掲げた原始共産主義思想のもと、国民800万人の四分の一、200万人もが虐殺されるという世界史に残る悲劇を背負っているのです。そしてそれは遠い昔ではなく1970年代、近現代の出来事です。いまだに世界最貧国の一つである理由はこの惨劇にあり、国家の成長を阻害してきた根源なのです。

カンボジアの最低賃金が1万5千円程度に対して、この方々に政府から与えられる慰謝料は1ヶ月30\$(約3,300円)。それでも演奏に対しての寄付金やCDの売上げは全て地雷根絶のために使います。

「二度と地雷を使うことのないように」「二度と戦争が起きないように」と、世界中の紛争地へ歌いかけているのです。「妻も子もいるから30\$じゃ生活できないけど、私たち被害者にしかできない大切なことがある。だからここで毎日がんばってますよ」とお話ししてくれました。

齋藤 浩司 (さいとう こうじ)

株式会社B-WAY グループ 代表取締役

互助会から葬儀社を経て2001年同社創業。2002年に葬送支援NPO法人を創設。2010年には宗教法人を新規認証。CSR活動として、

2007年お寺で余ったお供え物を困窮世帯へ届けるフードバンクを設立。2013年からは東南アジアの貧しい子ども達への生活・教育支援を開始し、現在はカンボジアのスラムで孤児院と幼稚園を運営。活動時に各国の聖地を訪れ、宗教家や現地の人々から文化を学んでいる。東京都新宿区出身。

